「日本の新進作家展における〈現代性〉とその課題」

中村浩美（東京都写真美術館学芸課学芸係主任　学芸員）

「日本の新進作家展における〈現代性〉とその課題」

1　はじめに

東京都写真美術館は、1990年６月の第一次施設開館からそれにつづく1995年１月の総合開館以来、「日本における写真・映像文化のセンター的役割を果たしていくとともに、世界との交流の輪を広げ、国際的な文化交流の拠点ともなるよう、また開かれた参加型の美術館として広く都民の皆様から愛される美術館」をめざして、収集・展示・保存・調査・研究・普及など７つの基本的性格に沿った事業を展開してきた。とりわけ、当館の次代を担うべき作家に対する姿勢は、以下のように記されている。

「写真表現の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘し、新しい創造活動の展開の場とする」

こうした姿勢を実現化するため、開館時には「将来性のある作家を発掘」すべく、初の国際公募展による東京国際写真ビエンナーレ[1]が実施された。世界57ヶ国、地域からの応募作品は17,221点にもおよび、世界水準の作家・作品を一同に目にし、また当館の知名度とともに多岐にわたる活動を積極的にアピールできたという成果の一方で、一般公募による展覧会のクオリティや開催意義についてはいくつかの疑問も残された。こうした反省から、回を重ねるごとに公募枠は縮小され、東京国際写真ビエンナーレは1999年を最後に幕を閉じることとなった。がしかし、新たなる「創造活動の展開の場」は、2002年にスタートした現代写真のアニュアル展「日本の新進作家」シリーズへと受け継がれ、初回の「風景論」展は、社会的なランドスケープを含むきわめて写真的なアプローチで始まり好評を得た。

2　日本の新進作家展の転換

こうして始まった第１回展は、一定の評価および成果を得たものの、他方でひとつの問題点が投げかけられた。それは、「結局は、写真界だけじゃないか」という率直な作家たちの声である。館名に〈写真〉とある以上、ある程度の制約は覚悟していた彼らにとって、〈新進作家〉という名の下に新たな「創造活動の展開の場」を拓くことは、かねてより求めていた可能性を期待していたに違いない。というのも、近年では国内外ともに近代・現代美術館における写真展が活発に開催され、ひとつのカテゴリーにあてはまらない作家たちの多種多様な活動ぶりが紹介されてきたからである。そこで、第２回展からは、写真界のみにこだわることなく、作家の調査範囲を拡げていった。こうした状況を生み出した時代背景には、一体何があるのだろうか。出展するアーティストや写真家たちに戸惑いはないのだろうか。また、鑑賞する側である来館者はどんな願いをそこに託し、また叶えられていくのだろうか。さらに、開催する美術館側にはどんな問題点が考えられるのだろうか。それらを実態に即して調査すべく、過去に開催されたふたつの展覧会について、

①　出品作家たちの言葉（ステイトメントより）

② 来館者によって得られたアンケートの集計
③ 展評
以上の３点から、具体的な検証を試みたいと思う。

幸福論　On Happiness

第２回目となった「幸福論」では、前述のとおり従来の写真的なアプローチから離れ、近年文学界や映画界でことさら注目され、ひとつの時代を物語るキイワードともなった〈しあわせさがし〉というフレーズに注目した。写真の領域を拡げるべく、あえて美術的なアプローチとプレゼンテーションに挑む作家たちを紹介したのである。調べてみると、幸福、幸せ、しあわせという言葉を使った書名は、それこそ有名無名を問わず、自叙伝、エッセイからビジネス書、哲学書に至るまで、まさしく星の数ほど存在する。そのなかでも興味深かったのは、「幸福論」と題された先人の教えと、軽やかなエッセイであった。とりわけ、次の言葉は展覧会そのものを象徴するフレーズとして、会場内にインスタレーション化されエントランスに設置された。

「苺は苺の味がするように、人生は幸福の味がする」[2]

それに呼応するかのように、それぞれの幸福論を求めて、みずからの〈しあわせさがし〉を独自の方法論で探ろうとする３人の作家を選出した。彼らの活動範囲はアート、パフォーマンスアート、コマーシャル（ファッション）等いずれも異なるものの、テーマと同時に、〈写真〉という表現手段をいかに作品に用いるか、は共通の課題となった。

① 出品作家たちの言葉（ステイトメントより抜粋）

小松敏宏：「『ジャパニーズ・ハウス』（1997，2002－03年）は家族のアイデンティティについてのものである。プロジェクトは複数の日本の家族の肖像とそれらの家族によって建てられた住宅のモンタージュによって構成されるが、完成されたイメージは日本人の持ち家にたいする願望を表現する。家族の依頼で建てられた住宅の写真は、背景から切り取られ、家族の頭部に貼り付けられ、仮面となり家族成員の個々のアイデンティティを隠蔽するとともに、家族全体のアイデンティティとなる。家屋と家族の肖像とが結合してできたシュールレアルなイメージは、「アントロポモフィズム」（擬人観）となり、建築と人体との類似性を探る」[3]

三田村光土里：「人生の中で幸せだと思える時間が、どんなに短くても、どんなに長くても、大きな時間の流れの中では、やはり一瞬の輝きに過ぎない。また、日々起こる出来事とともに生まれるその時々の感情は、およそ記録されることは不可能で、私たち自身の記憶の中でだけ生きているのであろう。しかしたとえ一瞬の幸せでも、それが強い光として記憶の中で輝いていれば、幸せな人生だったと最期に感じられるのではないだろうか。そして肉体を失うと同時に時空を失ったその一瞬の記憶は、別の次元でなお、永遠の記憶として輝き続けているの

かもしれない」[4]

蜷川実花：「私は写真にかかわるすべてのことを愛しています。ファインダーを覗き、意識すら経由せず、シャッターをきる。忘我というのか、失神しているような、感覚。自分が宙にういているような気分になれた時よいものが出来る、というはっきりとした方程式が、私の中にはあります」[5]

② 来館者によって得られたアンケートの集計

1．告知の効果

もっとも多かった回答は、「当館のポスター、ニュース、チラシを見て」（25％）、ついで「知人友人に聞いて」（22％）「雑誌記事を見て」（11％）の順。

2．地域性

都内が圧倒的多数を占め、ついで神奈川、埼玉、千葉等関東圏がつづく。

3．性別および年齢

女性が79％と、男性の19％を圧倒する。20代が60％を占める。

4．職業

学生が約半数を占め、会社員、自由業へとつづく。

5．来館頻度

初回が60％、「２～５回」が30％を占め、常連客を大きく上回った。

6．来館人数

２人が60％を占め、ついで３人が30％、グループ鑑賞はあまりない。

7．来館形態

「友人」がもっとも多く、「恋人」へとつづく。

8．展覧会の感想

支持）　空間をこんなに広くとっているのを見たのは久し振りです。
作品を見るのに、すごく気持ちがいい。
手に触れたりできたのが良かった。
広告のイメージのポップさを良い意味で裏切られて、静かで気持ちよかった。
幸福というとかく浮き足だってみえるものを、３名の方の作品が淡々としかし情熱をもって表現していたところが良かったと思う。

不支持）作品数が少ない。
展示の仕方がよくない。

9．作家への感想

小松敏宏）「ジャパニーズ・ハウス」はむしろ人間の不幸論の面が強い気がする。犬だけ家で顔が隠れていないところをみると、犬のような動物こそそういう重荷を背負うことのない幸福の存在の象徴に思える。

三田村光土里）あの時代には私は存在しないけど、温かく、懐かしく感じました。

蜷川実花）涅槃的とか様々な形容詞で評されるが、蜷川実花さんの世界はもっとライトで日常的で本当にこどもが何かに夢中になった時、対象を見つめる視点に似ているのかも、と感じて良かった。

10. 今後希望する展覧会

蜷川実花個展（33）

若手・新人作家の展覧会（14）

体験・参加型の展覧会（10）

インスタレーションを多用した展覧会（5）

③　展評

「箱が気になる　私的領域かカメラか」前田恭二　読売新聞　2003年9月18日[6]

新花論　On Flowering Images

2004年冬。クリスマスからお正月という街も人も華やぐ時期にかけて、〈花〉を共通のテーマとした「新花論」が開催された。今回は観阿弥のあらわした〈めづらしきもの〉に眼をとめ、前回の「幸福論」との関連性や継続性も感じられるよう、つぎの言葉をテキストの冒頭と巻末に引用した。

「なぜいつも遠くへばかりいこうとするのか？

見よ、よきものは身近にあるのを。

ただ幸福のつかみかたを学べばよいのだ。

幸福はいつも目の前にある」[7]

「花を与えるのは自然。編んで花輪にするのは芸術」[8]

この言葉から、新たなる花の解釈をめぐる旅が始まったといえる。花はわれわれ日本人にとって古（いにしえ）の時代から生活の一部として親しまれてきたものであった。とりわけ、わが国が世界に誇る花文化〈いけばな〉の世界では、それぞれの流派が提唱する独自の花論（かろん）が存在し、それらに従って花を生けるさまざまなスタイルが生まれたという、まさに百花繚乱の様を呈してもきた。「身近」にあり、「目の前」にある花を、これまでどれだけのアーティストや写真家たちが作品の主題にしてきたことであろう。ヌード、風景、そして植物（花）といえば、アートにとっては永遠に枯渇することのない創造の泉であると同時に、どこまでいっても到達しえない終着点でもある。そこで、現在アート、写真の両域で活動する4人の作家たちに、〈いけばな〉の花論になぞらえて彼らの花に寄せる想いを自由な発想で表現してもらおうという試みが具体化したのだ。

① 出品作家たちの言葉（ステイトメントより抜粋）

赤崎みま：「光の庭を歩く－平和でありますように。しあわせになれますように。
光の庭にたどりつく－そこではこの世のいのちを終えたものが、ふたたび光る姿に出会うことができる」[9]

銅金裕司：「花を見るとき、人は人であることを確認し、安楽し、ほっと胸を撫で下ろすのである。花こそが精神の目覚めなのだろう。そんな自己に覚醒、陶酔する契機こそが〈美〉的なもの、であるとは言えないだろうか？」[10]

櫃田珠実：「バラは日本、中国、西および小アジアに起源をもつ７種ほどの野生バラにはじまり世界中に広がっていった。わずかな差異を求める狂信的な愛好者や、未知の花を夢みるブリーダーによって人工交配が繰り返されている。現在は数万の品種が存在するといわれ、そしてそのすべてのバラは名前をもつ。幻想の結実は、命名されその〈存在〉をとどめるのか」[11]

鬼頭健吾：「私は常にとりとめもなく広がり、そしてその中で拡散や収縮といった、相反する運動を繰り返していくような運動体としての構造というものを意識している」[12]

② 来館者によって得られたアンケートの集計

１．告知の効果
もっとも多かった回答は、「当館のポスター、ニュース、チラシを見て」(25%)、ついで「恵比寿ガーデンプレイスに来て」(19%)「知人・友人に聞いて」(18%) の順。雑誌等の記事掲載や展覧会告知と当館ホームページは、ほぼ同率の10%前後であった。

２．地域性
都内が圧倒的多数を占め、ついで神奈川、埼玉、千葉等関東圏がつづくが、その他の合計が都内の約半数を占め、地方からの来館者層が固定客としてあることがうかがわれる。

３．性別および年齢
女性が59%、男性の約２倍を占め、とりわけ20代が目立つ。

４．職業
学生がもっとも多く、ついで会社員、自由業へとつづく。

５．来館頻度
初回が45%、「２～５回」が30%を占め、常連客を大きく上回った。

６．来館人数
１人が40%を占め、ついで２人が20%、グループ鑑賞はあまりない。

７．来館形態
１人がもっとも多く、ついで「友人」「恋人」へとつづく。

8．展覧会の感想

支持）　花のイメージのとらえ方に特徴があった。
目だけではなく香りも楽しめる展覧会でよかった。
今まで考えてきた写真とは少し違った視点が面白かった。
感性を心地よく刺激された。
写真という概念の広さを知った。
空間づくりに感心した。

不支持）見慣れた花の写真とかけ離れていたので少し戸惑った。
匂いと機械音であまり落ち着かない
もう少し説明（分かりやすく）が欲しかった。
作者の意図があまりよく理解できなかった。
作品数が少ない。
展示の仕方がよくない。

9．作家への感想

赤崎みま）写真の可能性を誠実に追い求めているので見る側が静かな感動を覚える。
植物が発光するというコンセプトが面白く、写真も綺麗だった。

銅金裕司）花を認識することの意味付けに感心した。
鑑賞方法が分かりづらい。

櫃田珠美）写真と現実を人工花びらでつなげようとしている気持ちが伝わった。
香りと大きな写真で自分がバラに接近しているように感じられて素敵だった。

鬼頭健吾）写真機の中にトリップしたようで楽しかった。
キラキラと壁に乱反射した草花がぐるぐると部屋を走っていて素敵だった。

10. 今後希望する展覧会
若手新人作家の展覧会（20）
インスタレーションを多用した展覧会（15）
他の写真家の花の写真展（10）

＊以下、古典的な銀塩写真、ドキュメンタリー、自然や地球をテーマにした写真展、海外の写真家・新進作家等に加え、実際にアーティストとふれあうことが出来るような写真展へのリクエストがあった。これは、本展が現存の作家による展覧会であること、また現代写真・現代美術を扱った展覧会であることに起因すると思われる。

③　展評

「新花論　櫃田の新作　興味深い“隙”」高橋綾子　中日新聞　2005年1月12日[13]

3 〈現代性〉とその課題

最後に、ふたつの展覧会で試みてきたことを改めて整理してみよう。まずひとつには、徐々にその領界域があいまいになってきている美術と写真を、同じテーマのもとに、また同一の空間の中で展示し、それぞれの共通点や相違点を探ろうとしたこと。そしてもうひとつは、写真を〈内〉(写真家、写真ファン)と〈外〉(アーティスト、アートファン)から見てみようとしたことである。今回の結果をひとことでいうならば、写真における〈現代性〉はもはや写真だけで語り尽くせない、ということだ。それはそのまま他のアートの表現手段にも換言できうることだと思われるが、写真もまたひとつの世界の中に投げ込まれた、その世界をつくりあげるためにささやかな構成要素の欠片に過ぎないからであろう。なぜなら、ここで注視したのは「何が写真に写っているのか」ではなく、「写真で何を写したいのか」という、根源的な問いである。それは、決して「巧い」とか「綺麗」といった紋切り型の技術力ではなく、むしろ他の構成要素とともにどんな世界に生きているのかという表現力を問うものであったからだ。

また、若年層における〈内〉と〈外〉の関連性・相関性は、その支持層および支持する作家たちに重要な共通点があるということにも気づかされた。たとえば、両者に主たる作家や写真家名をあげた場合、ほとんどの人が素早く反応することや、会期中開催されたワークショップの参加者たちが、別の回で他の出品作家の話も聞いていることにも驚くとともに励まされた。今回知り得た結果は、まだ小さな芽にすぎないかもしれない。しかし、こうしたいくつかの共通点を、ひとつずつ拾い集め、つなぎ合わせて、一本の線にしていくこと。そこに、写真を専門とする美術館として新たな展覧会の可能性と必要性を見出したことは、何よりも大きな成果であり、また同時に、今後問われていくべき課題でもあると確信する。

註:

1 イズム '95:第1回東京国際写真ビエンナーレ展(1995年6月10日〜7月30日)
審査員:三木多聞(館長・審査委員長)、ジャン=リュック・モンテロッソ(ヨーロッパ写真美術館館長)、金升坤(写真教育者)、アン・W・タッカー(ヒューストン美術館学芸員)、平木収(写真評論家)
キュレーター:中村浩美

2 『幸福論』アラン著 白井健三郎訳 集英社 1993年

3 イン・プレイス/アウト・オブ・プレイス 撮影:小松敏宏
「ジャパニーズ・ハウス」(フォト・コラージュ)
「アーティスト・アンド・ヒズ・スタジオ」(ミクストメディア)

4 グリーン・オン・ザ・マウンテン(ミクストメディア) 撮影:三田村光土里

5　アシッド・ブルーム＃３（ミクストメディア）
6　読売新聞（2003年９月18日）
7、8　『ゲーテ詩集』ゲーテ著　高橋健二編訳　新潮社　1952年
9　光の庭（イルフォクローム・プリント）
10　植物カメラ（ミクストメディア）
11　イマジナリーガーデン（ミクストメディア）
12　光柱（ミクストメディア）
13　中日新聞（2005年１月12日）
14「幸福論」会場デザイン①
15「幸福論」会場デザイン②
16「新花展」会場風景
17「新花展」会場風景

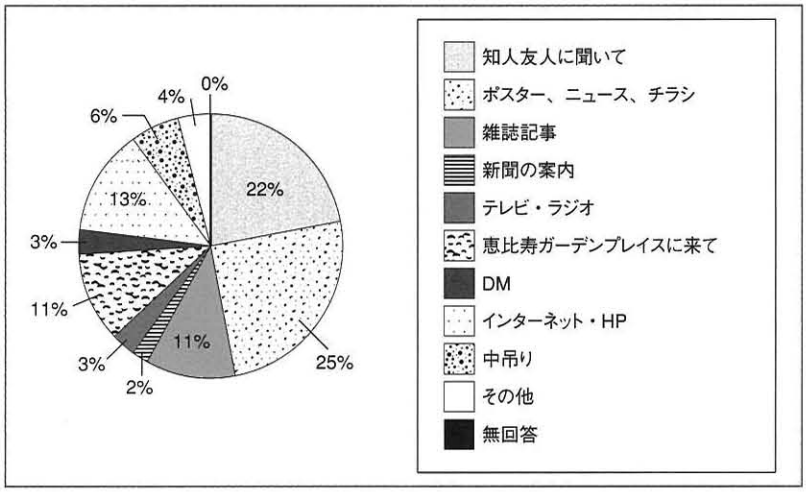
＊ 9,10,11,12,16,17　撮影：前田敏行
＊ 14,15　デザイン：ミュゼグラム

資料編

日本の新進作家 vol.2『幸福論』アンケート集計

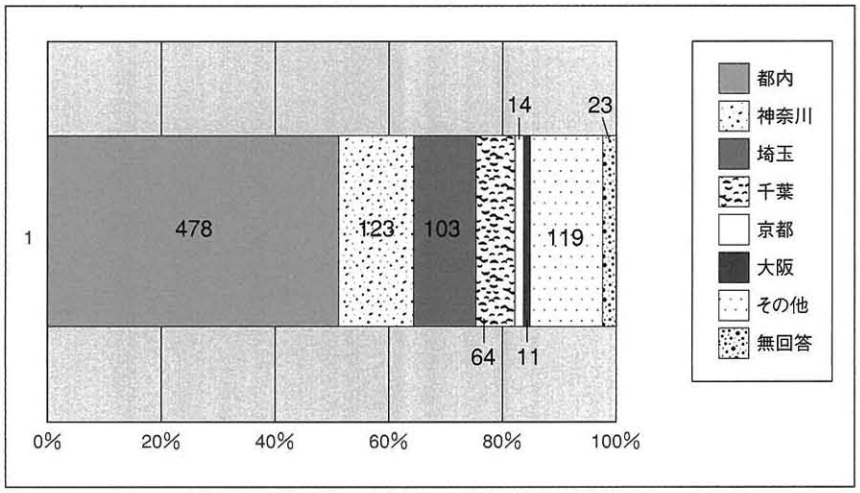
1．期間　2003年9月9日～10月5日　アンケート集計　全935件

2．今回の展示は何でお知りになりましたか?（単位：人）

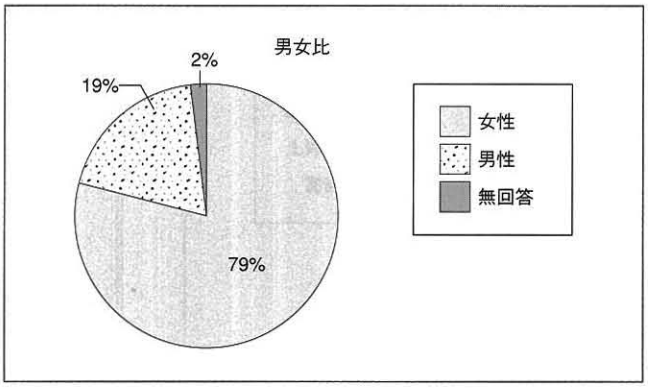


新聞の案内	14
テレビ・ラジオ	32
当館のポスター・ニュース・チラシ	230
雑誌記事	102
知人・友人に聞いて	206
恵比寿ガーデンプレイスに来て	97
その他	39
DM	30
インターネット・HP	115
中吊り	53
学校	16
無回答	1

3．お住まいは?（単位：人）

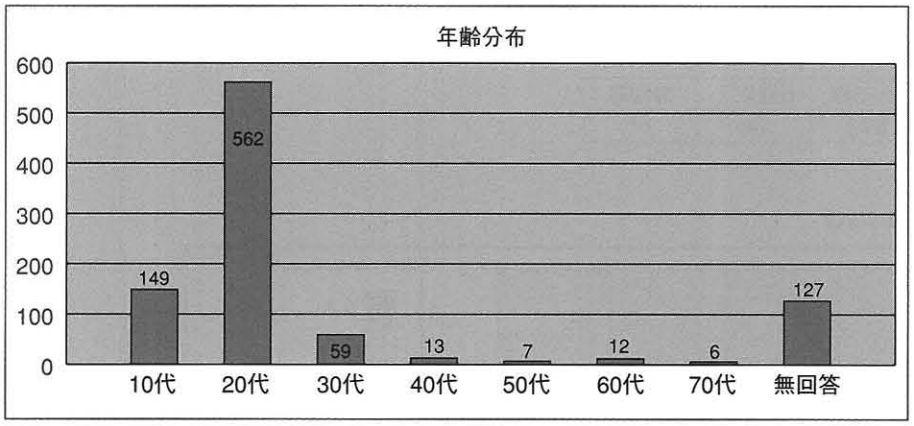


4．性別および年齢（単位：人）

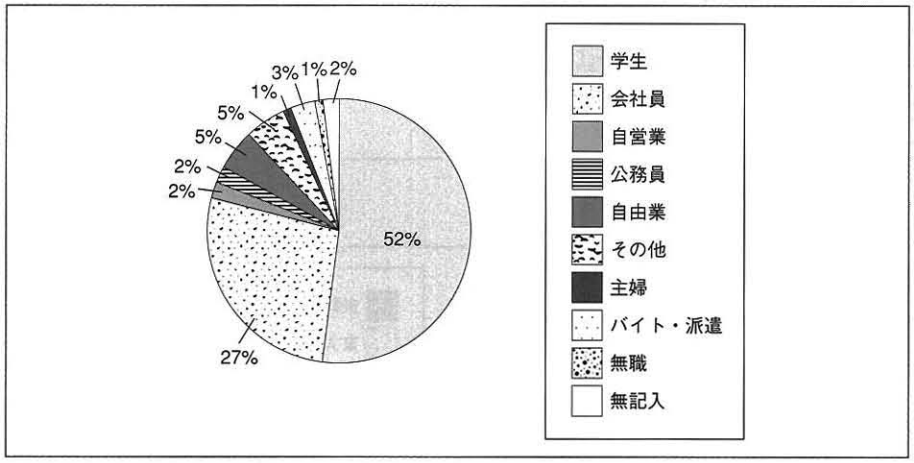


性　別	（単位：人）
女　性	733
男　性	179
無回答	23
合　計	935

年　齢	（単位：%）
10代	15.9
20代	60.1
30代	6.3
40代	1.4
50代	0.7
60代	1.3
70代	0.6
無回答	13.7



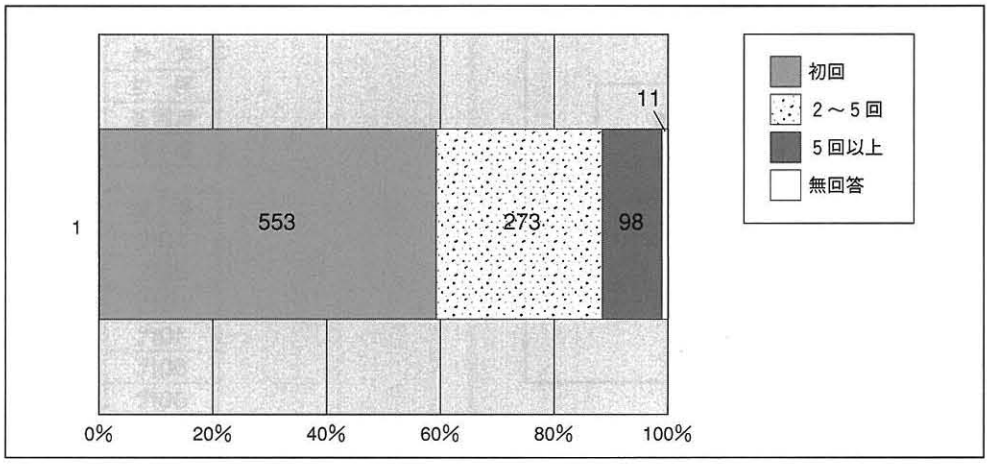
5．ご職業は?（単位：人）



職業名	学生	会社員	自営業	公務員	自由業	その他
（単位:人）	488	250	16	18	45	44

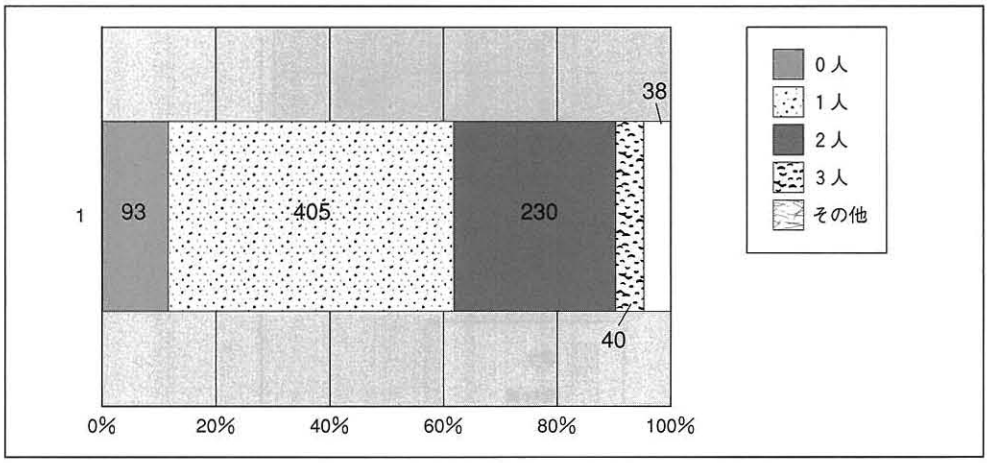
職業名	主婦	バイト・派遣	無職	無記入
（単位:人）	14	31	10	19

6．ご来館回数は?（単位：人）

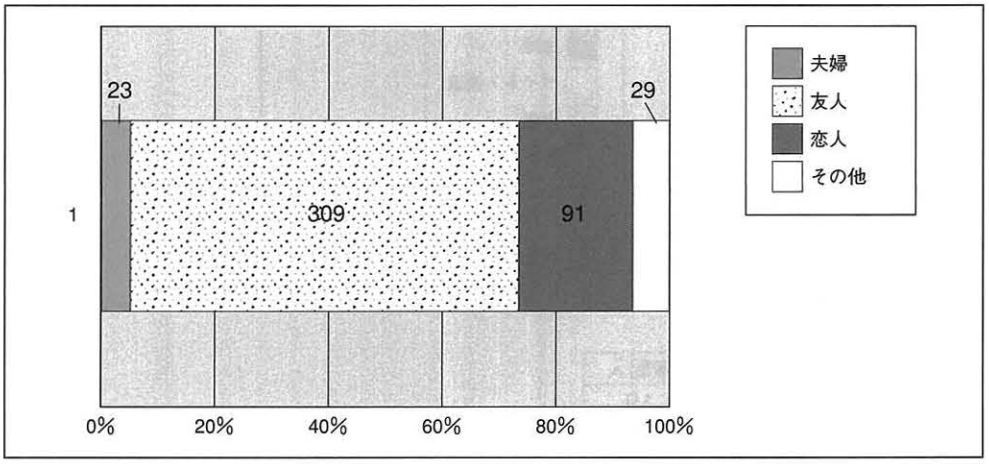


来館回数	初回	2～5回	5回以上	無回答
人	553	273	98	11

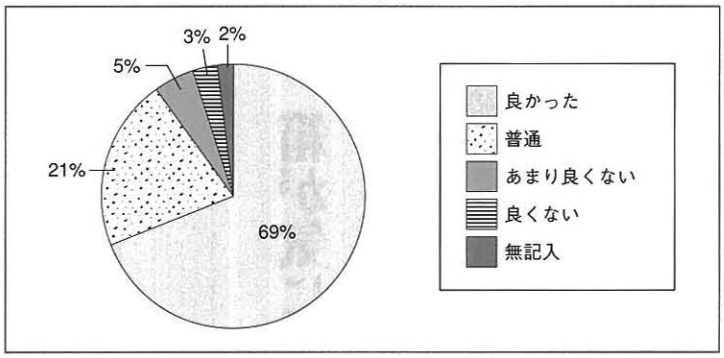
7．ご一緒に来られた人数（単位：人）



8．ご一緒に来られた方とのご関係（単位：人）



9．ご覧になった感想（単位：人）



感想	良かった	普通	あまり良くない	良くない	無記入
人	638	198	49	32	18

※ご意見　・空間をこんなに広くとっているのを見たのは久し振りです。作品を見るのにすごく気持ちがいい。
広告のイメージのポップさを良い意味で裏切られて、静かで気持ち良かった。（同様25件）
・展示方法が良くない（10件）
・作品が少ない（24件）
・足の不自由な人に不便な展示は避けるべきだ
・「しあわせアルバム」が良い（７件）
・手に触れたりできたのが良かった（３件）
蜷川実花：涅槃的とか様々な形容詞で評されるが、蜷川実花さんの世界はもっとライトで日常的で本当に子供が何かに夢中になった時、対象を見つめる視点に似てるのかも、と感じて良かった。
三田村光土里：あの時代に私は存在しないけど、温かく、懐かしく感じました。
小松敏宏：「ジャパニーズ ハウス」はむしろ人間の不幸論の面が強い気がする。犬だけ家で顔が隠れていない所をみると、犬のような動物こそそういう重荷を背負うことのない幸福の存在の象徴に思える。
・幸福というとかく浮き足立ってみえるものを、３名の方の作品が淡々としかし情熱をもって表現していたところが良かったと思う。

10．今後どのような展覧会を希望されますか?

・写真家と写真以外のアーチストのコラボレーション（２件）
・美術館で、作家の制作を見られるところがあるので公開撮影を見たい。
・体験・参加型（10件）
・蜷川実花個展（33件）
・若手新人（14件）
・インスタレーション（５件）

11．その他、東京都写真美術館への要望がありましたらご記入ください。

・もっと安くしてほしい（６件）
・安すぎる（１件）
・チケットの買い方（場所）がわかりづらい（２件）
・広告・チラシを増やしてほしい（館外）（４件）
・開館時間を長くしてほしい（２件）
・受付の方たちがもっと笑顔だといい（１件）

※備考　監視クレーム　21件

文化

写真

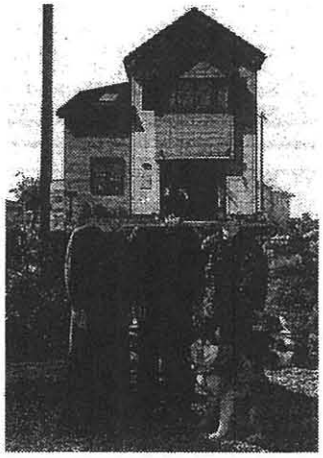
■新進作家展「幸福論」

箱が気になる

私的領域かカメラか

東京・恵比寿の東京都写真美術館の新進作家展「幸福論」は〝箱〟が気になる展覧会である。会場には、段ボール箱が大量に積み上げられている。その箱は実は仕切り壁となっていて、内側に出品作家三人の展示がある。この斬新な会場構成のためか、それぞれの作品もまた、箱をめぐる連想に誘うところがある。

カラフルな花の写真で知られる蜷川実花は、囲いの内側を一つの部屋に見立てている。花の写真をくまなく壁に張り、インテリア類にもあしらう。その写真はもともと現実の花を借りた、内的なイメージの表現という側面が強い。その内なる世界が箱のごとくに完結したものであることを、展示は印象づける。



小松敏宏「ジャパニーズ・ハウス」シリーズ（2003年）より

昨年まで海外で活動していた小松敏宏は、二つのシリーズを出品している。一つは日本の家族を撮影し、顔の部分にその住まう家をコラージュした連作。奇妙な感覚とともに、家という箱が家族のよりどころとなり、象徴となる日本社会のありように目を向けさせる。

三田村光土里は、写真家でなく、現代美術の分野で発表してきた人。七十年以上前、ベルギーあたりの家族を撮ったとおぼしき古いネガをモチーフに、その映像と逆回りに動く時計などを交えた空間を作り出した。記憶を封印した写真という箱を開けて、そこにあったかもしれない幸福の感覚をそっと取り出すような作品と言えばよいか。

部屋や家、家族写真――こうして見てくると、いわば私的な領域に対して、三者三様に着目した作品群だと言える。会場構成は、箱によってその私的な領域を象徴しているように見える。ただし、小松がもう一つのシリーズで、自身のアトリエの縮小模型を作り、それがカメラと似た構造をしていることを示している通り、写真はカメラという箱と密接な関係を持っている。

ここで「幸福論」というタイトルを思い出すと、幸福のありかを箱＝私的な領域、に探る展覧会と受け取ることもできる。だが箱＝カメラ、という視点で眺めるのも面白い。写真を私的イメージで満たそうとする蜷川、写真から私的な記憶を解き放とうとする三田村、といった具合に、各作家の写真に対するスタンスが見えてくるからである。

10月5日まで。

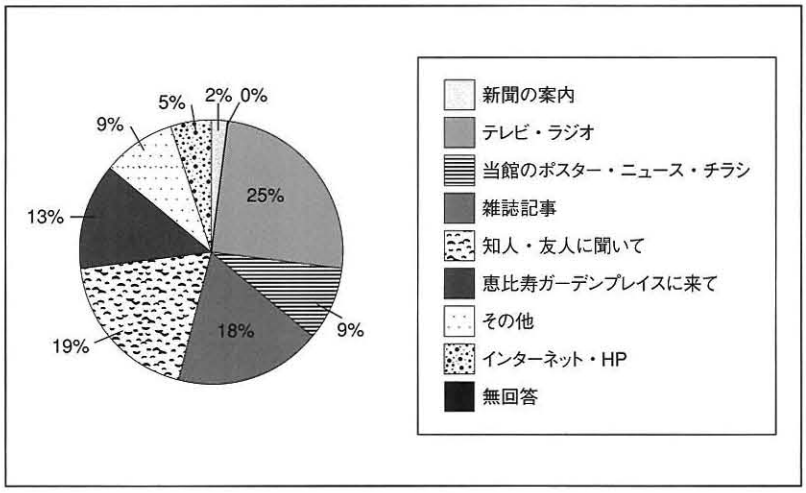
（前田　恭二）

読売新聞（2003年9月18日）

日本の新進作家 vol.3『新花論』アンケート集計

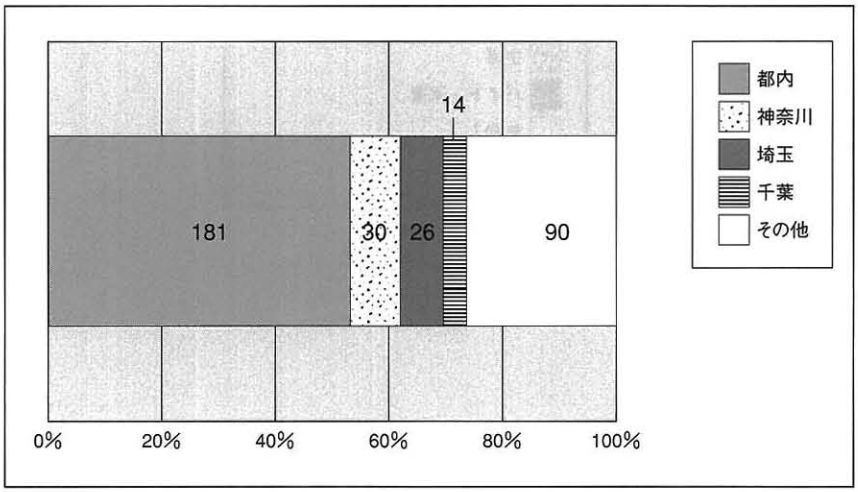
1．期間　2004年12月25日～2005年2月6日　アンケート集計　全378件

2．今回の展示は何でお知りになりましたか?（単位：人）

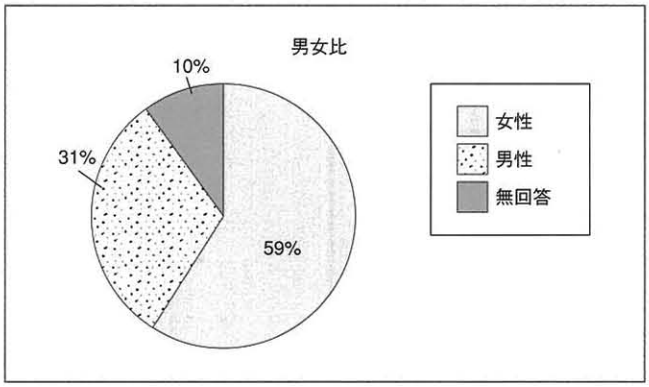


新聞の案内	8
テレビ・ラジオ	1
当館のポスター・ニュース・チラシ	94
雑誌記事	35
知人・友人に聞いて	69
恵比寿ガーデンプレイスに来て	71
その他	49
インターネット・HP	33
無回答	17

3．お住まいは?（単位：人）

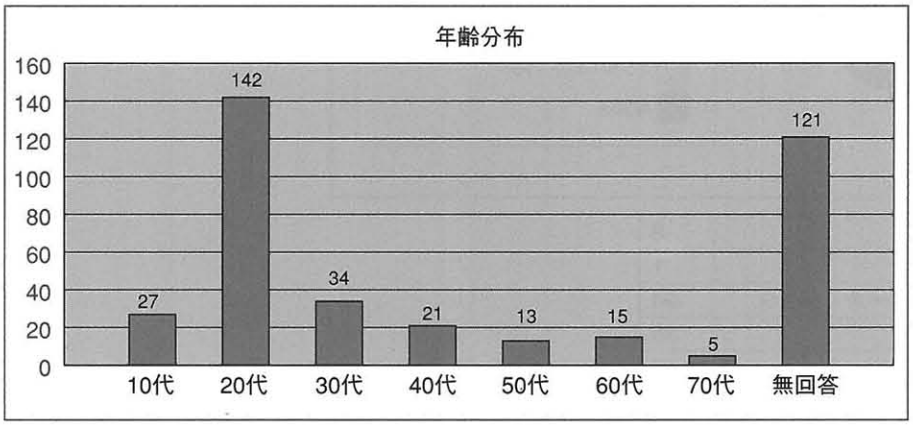


4．性別および年齢（単位：人）

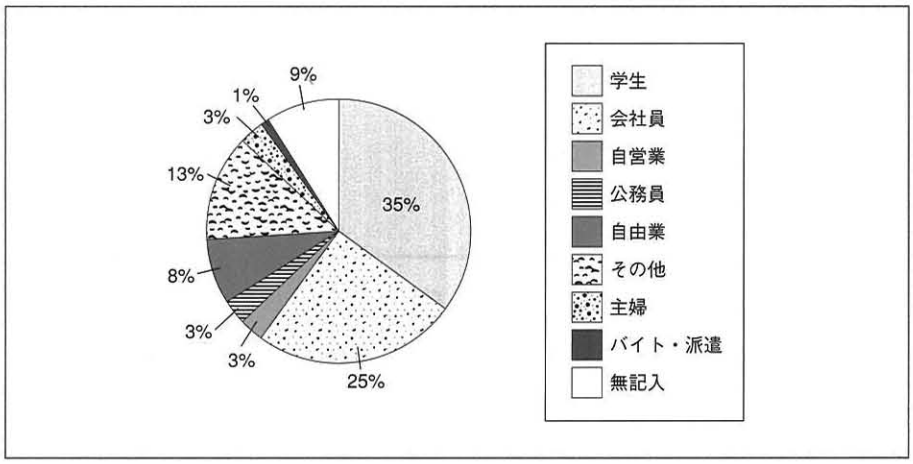


性　別	（単位：人）
女　性	222
男　性	117
無回答	39
合　計	378

年　齢	（単位：%）
10代	7.1
20代	37.6
30代	9
40代	5.6
50代	3.4
60代	4
70代	1.3
無回答	32



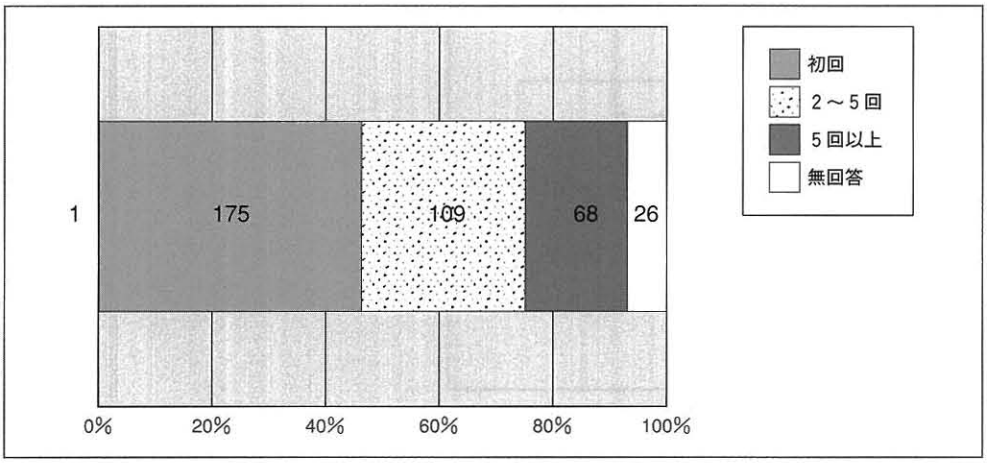
5．ご職業は?（単位：人）



職業名	学生	会社員	自営業	公務員	自由業	その他
（単位:人）	127	96	13	13	29	51

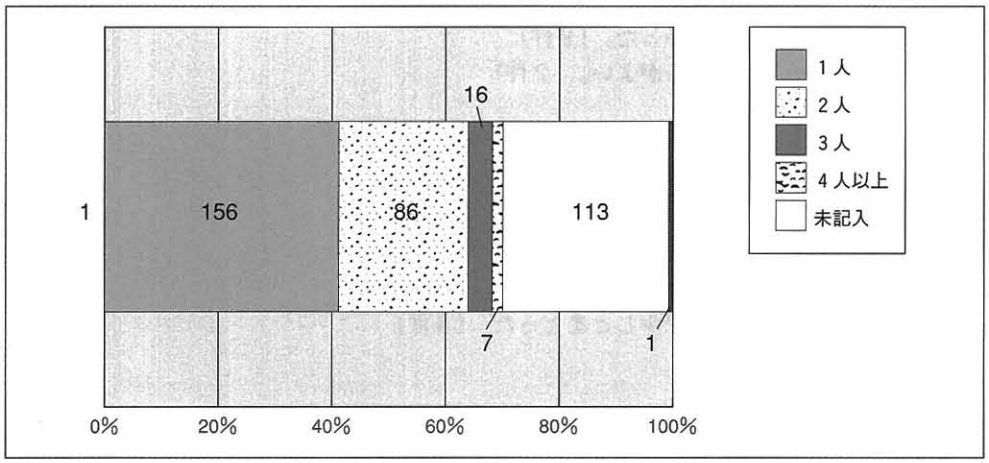
職業名	主婦	バイト・派遣	無記入
（単位:人）	12	4	33

6．ご来館回数は?（単位：人）

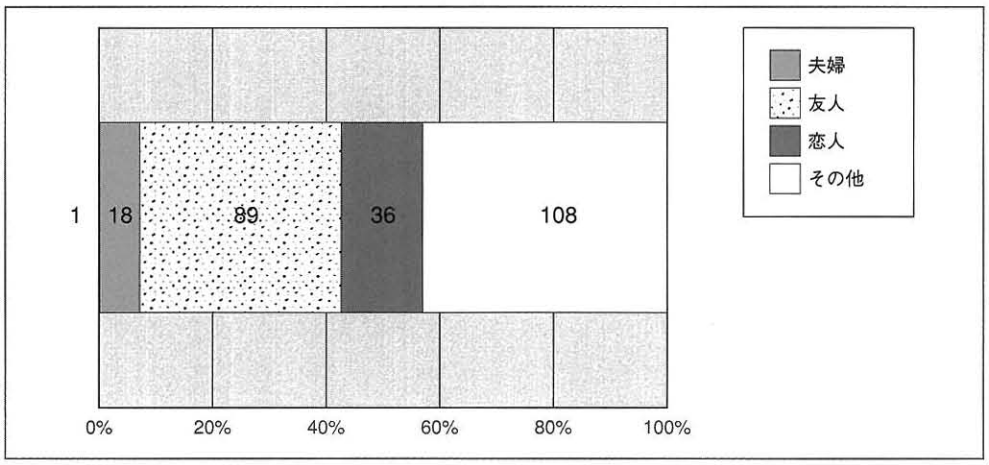


来館回数	初回	2～5回	5回以上	無回答
人	175	109	68	26

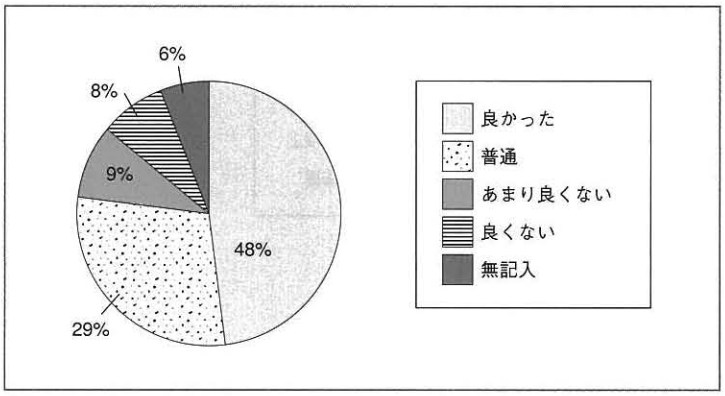
7．ご一緒に来られた人数（単位：人）



8．ご一緒に来られた方とのご関係（単位：人）



9．ご覧になった感想（単位：人）



感想	良かった	普通	あまり良くない	良くない	無記入
人	171	106	33	27	23

※ご意見
- もう少しボリュームが欲しかった。作品数が少ない。(32件)
- 作者の意図があまり理解できなかった。(17件)
- 目だけでなく香りも楽しめる展覧会でよかった。(13件)
- 今まで考えてきた写真とは少し違った視点が面白かった。(12件)
- もう少し説明（分かりやすく）が欲しかった。（９件）
- 見る前に見方について情報があったほうがよい。（２件）
- 空間作りに感心した。（７件）
- 新鮮に感じた。（６件）
- 感性を心地よく刺激された。（５件）
- 展示の仕方がよくない。（５件）
- 見ごたえがあってよかった。（４件）
- 写真という概念の広さを知った。（３件）
- 見慣れた花の写真とかけ離れていたので少しとまどった。（３件）
- 壁がきたなかった。（３件）
- リフレッシュした。（２件）
- 花のイメージのとらえ方に特徴があった。（２件）
- もっとたくさんの花が見たい。（２件）
- 匂いと機械音であまり落ち着かない。（２件）
- また違った花の良さを知った。（２件）

10. どの作家に興味をもちましたか?

赤崎みま	銅金裕司	櫃田珠実	鬼頭健吾
128	58	82	58

赤崎みま
・光が幻想的だった。(6件)
・強烈な色使いだが優しい感じがした。(3件)
・見たことがないもので興味をひいた。(3件)
・不思議な印象を受けた。(2件)
・花をストレートにとらえていて見やすかった。(2件)
・写真の配置がきれいで見やすかった。(2件)
・刺激を受けた。(2件)
・写真の可能性を誠実に追い求めているので観る側が静かな感動を覚える。
・詩と写真の組み合わせに味わいがあってよかった。
・繊細さを感じた。
・光と植物は切っても切れない関係にあるとあらためて気付いた。
・植物が発光するというコンセプトが面白く、写真も綺麗だった。
・分かりやすかった。
・プリンターの名前が出ていたのが珍しくて良かった。
・植物の声が聞こえてきそうだった。
・人間の内面を見るようだった。

銅金裕司
・発想に感心した。(3件)
・見せ方が面白かった。(2件)
・分かりやすいように図での解説がほしかった。(2件)
・花が話すということが驚きだった。
・花を認識することの意味付けに感心した。
・植物の存在についてあらためて考えさせられた。
・生々しかった。
・控えめであり、強烈だった。
・鑑賞方法が分かりづらい。
・植物カメラに興味を持った。

櫃田珠実
・いい香りでリラックスできた。(7件)
・新鮮だった。(2件)
・親近感を持てた。(2件)
・写真と現実を人工花びらでつなげようとしている気持ちが伝わった。
・写真からの延長のような花びらが床にまかれているのが幻想的だった。
・香りと大きな写真で自分がバラに接近しているように感じられて素敵だった。
・イギリスの生活からバラをモチーフにしたということでわかりやすく、世界に入っていきやすかった。
・花の生命力を強く感じられた。
・もっと色々なバラを見たい。
・現実では感じられない花を見ることが出来た。
・力があった。
・もっと点数を見たかった。

鬼頭健吾
・着目点に感心した。(4件)
・写真機の中にトリップしたようで楽しかった。(3件)
・モーター音が少し気になった。(2件)

・ずっといたいと思った。（2件）
・キラキラと壁に乱反射した草花がぐるぐると部屋を走っていて素敵だった。
・現実とは何かを考えさせられた。
・作者の心を感じた。
・かっこよかった。

11. 今後どのような展覧会を希望されますか?

・若手新人（20件）
・インスタレーション（15件）
・他の写真家の花の写真展（10件）
・古典的な銀塩写真（6件）
・ドキュメンタリー（身近なもの）（4件）
・自然、地球をテーマにした写真展（4件）
・海外の写真家の展覧会（4件）
・海外の新進作家（3件）
・空の写真展（3件）
・複数の作家がコラボレートする展覧会（2件）
・写真史がよく分かる写真展（2件）
・デジタル処理された写真の展示（2件）
・風景写真の展覧会（2件）
・海、珊瑚礁の写真展（2件）
・コンテンポラリーフォトグラフィー（2件）
・アジアの写真展
・チェコのアーティスト
・実際にアーティストとふれあうことが出来るような写真展
・子供も楽しめるような写真展
・ファッションフォト
・戦中の写真
・人形の写真展
・日本をテーマにした写真展
・子供の写真展
・動物の写真展

中日新聞 CHUNICHI SHIMBUN　名古屋 Nagoya

2005. 1. 12

●レビュー

美術

「新花論」 ●櫃田の新作 興味深い"隙"

生け花の世界では、それぞれの流派が提唱する独自の流儀、方法論のぞらえてタイトルが付されぞうだ。その花論になれ、根源的な美学上の主題としての「花」を投げかけられた、四人の現代作家によるグループ展である。

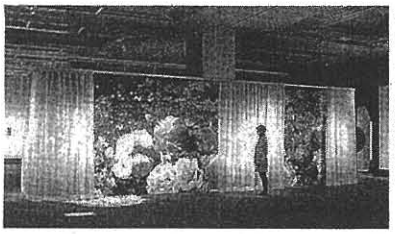
「日本の新進作家vol.3 新花論」（東京都写真美術館／目黒区三田1、2月6日まで）には、赤崎みま、銅金裕司（いずれも神戸市生まれ）とともに、櫃田珠実（一九五八年高松市生まれ、愛知県立芸術大大学院・英国王立芸術大学院修了）、鬼頭健吾（七七年名古屋市生まれ、名古屋芸術大卒、京都市立芸術大大学院修了）の二人が選ばれている。選考に関して作家の出所の傾向はたまたまのことではあるが、櫃田と鬼頭が、キャリアの相違はあるものの、ともに東京での発表拠点を持っていることは一つの要因であろう。

展示室の柱を囲むように位置する幅八㍍余の壁「イマジナリーガーデン」＝写真。デジタル技術を緻密に応用して、甘美なまでの虚構性を追求する櫃田の新作は、本展で空間的・技術的スケールを得たことで、潔いまでの思いきりと、良い意味での隙をみせたように思われた。

四角い壁には白いカーテンがさらりと垂れる。上質な版画紙にプリントされた花園のマットな風合いは、空気の粒子を感じさせるがごとく、不可思議な奥行きをみせた。あくまでも絵画に立脚する姿勢を意識して来た櫃田が、現実のカーテンを用い、造花の白い花びらを散らし、さらには香水までも作品の一要素としたことには、小さな驚きを禁じえなかったが、そこに垣間見た隙にこそ、櫃田が制作で追求する虚構性、あるいは人工性への自己言及があるのではないか。

ところで十周年を迎えた東京都写真美術館は、恵比寿ガーデンプレイスと称された再開発商業地に位置する。六本木ににぎわいを奪われた感のある恵比寿にて問う。美術館は、はたして花園（ガーデン）か？ 美術が徒花ではないために、自身も真摯に取り組まねばと、新年に心した。

（高橋綾子＝名古屋芸術大講師）



中日新聞（2005年1月12日）

東京都写真美術館　紀要No.5

編集：東京都写真美術館
制作・デザイン：㈱第一印刷所
発行：財団法人東京都歴史文化財団
東京都写真美術館　©2005
〒153-0062　東京都目黒区三田1-13-3
電話 03-3280-0031

The Bulletin:Tokyo Metropolitan Museum of Photography No.5

Edited by Tokyo Metropolitan Museum of Photography
Produced and Designed by Daiichi Printing co., ltd
Published by Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
Tokyo Metropolitan Museum of Photography ©2005
1-13-3,Mita,Meguro-ku,Tokyo 153-0062, Japan
Phone 03-3280-0031

Printed in Japan

Metro

Muse

Photo

Tokyo Metropolitan Museum of Photography

Tokyo
Metropolitan
Museum of
Photography